

## 「法供養」と「財供養」について

### 1、供養の大事

宗祖日蓮大聖人の御一期にあつて、当時の信徒方が日蓮大聖人のもとへ御供養の品々をお届けした様子と、その一人ひとりの篤い志に対する日蓮大聖人の感謝の思いが諸御書を通して拝されます。

「供養」とは、仏法僧の三宝を敬い、信仰の志を奉ずるといふ、私たちに於て大事な仏道修行の一つです。末法今時に於ける文底下種の三宝とは、仏宝が御本仏日蓮大聖人であり、法宝は本門戒壇の大御本尊であり、僧宝は第二祖日興上人を随一とする歴代の御法主上人猊下であります。

日蓮大聖人は『新池御書』に、

**法をこゝろえたるしるしには、僧を敬ひ、法をあがめ、仏を供養すべし。**

(御書 1 4 6 1 頁)

と、仏法僧の三宝に対する供養の大事を御教示されています。

では、なぜ供養が大事な仏道修行なのでしょう。

もとより信仰とは「南無」することであり、これを帰命と訳します。

日蓮大聖人は『白米一俵御書』に、

**帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり。** (御書 1 5 4 4 頁)

と御教示であり、我が命を仏に捧げる覚悟にこそ、信仰の本義があると明かされています。

同抄に於て、

**財あるも財なきも命と申す財に過ぎて候財は候はず。さればいにし(古)への**

**聖人賢人と申すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。** (同頁)

とお示しのように、過去の聖人・賢人が仏道の成就のために、身命を捧げて臨んだ仏道修行の数々が經典に説かれています。

### 2、過去の聖人・賢人による事供養

經典には釈尊が過去世にされた様々な修行を説いています。

「涅槃經」には、過去世に雪山童子として修行を重ねていた時に、自分の体を鬼神に捧げてまで仏の教を求めたとあります。

「法華經提婆達多品」には、檀王として真実の教を求めて、阿私仙人のもとで千歳もの間、給仕に励み続けたことが明かされています。

さらに、「大智度論」に説かれる、己の身の皮をはいで仏の一偈を書き留めようとした樂法梵志や、「法華經常不輕菩薩品」に説かれる、身命を賭して礼拝行を貫き通した不輕菩薩等、いずれも仏法に身命を捧げて仏道を成就した、釈尊の過去世の因位の修行を説いています。

また、「法華經藥王菩薩本事品」には、藥王菩薩が過去世において、法華經を説いた日月淨明德仏への供養を志し、自分の臂(ひじ)を七万二千歳の間焼き続けて、その灯りを供養したことが説かれています。

いずれも、過去の聖人・賢人が法を求めて身命を捧げて仏に供養したことを示されています。

しかしながら、それら遙か昔の熟益の時代に聖人・賢人が行じた供養の修行は、末法下種の凡夫である私たちが行ずる供養の修行とはなりません。

日蓮大聖人は、同抄の中で、

**薬王のひぢ(臂)をやき、雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいをと(劣)らぬ  
功德にて候へば、聖人の御ためには事供やう(養)、凡夫のためには理く(供)  
やう(養) (同1545頁)**

と、薬王菩薩や雪山童子のように身命を賭して法を求めた修行を「事供養」と言い、これに対し、一方の私たち末法の凡夫は、「理供養」を修することにより、過去の聖人・賢人等による「事供養」に劣らぬ功德が得られると御教示です。

### 3、末代の凡夫による理供養

それでは、私たち末法の凡夫が修する理供養とは、いかなる仏道修行なのでしょう。

これについて、同じく『白米一俵御書』には、

**たゞし仏になり候事は、凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり**

(同1544頁)

とあり、末代の凡夫は、志をもって三宝を供養することにより成仏が叶う、と教えられます。つまり、衆生が真心を込めて財物等を仏に捧げ、また仏法の道理に適った正しい修行によって仏道を成じていくことが「理供養」なのであります。これには「法供養」と「財供養」の二種があります。

### 4、法供養

「法供養」とは、仏の教えを讃歎し、経説に従って正法を弘め、人々を教化・利益することをいいます。末法の私たちの日常の信心修行では、不自惜身命の志をもって御本尊に真剣な題目を唱え、また日蓮大聖人の御金言や御法主上人猊下の御指南に随い、どのような困難にも怯むことなく折伏弘教に励むことが法供養に当たります。

また、日々の生活の中で、限られた自分の時間の中で寺院参詣をはじめ、各種会合への参加等のあらゆる信心活動に当てていく姿勢は、一身を仏に捧げる尊い志であります。更には、座談会などで講中の人達に、喜びの信仰体験や御本尊の功德について語り伝え、信仰の歓喜を分かち合うことも法供養なのです。

### 5、財供養

もう一つの「財供養」とは、食物や衣類などを文底下種の三宝に供養することです。この財供養によって仏法の法灯が護られ、それによって一切衆生が正しく仏道修行を志し、成仏を遂げることとなります。

日蓮大聖人は『新池殿御消息』に、

**法華経の行者を供養せん功德は、無量無辺の仏を供養し進らする功德にも勝  
れて候なり。**

(御書1363頁)

と、財供養により得られる甚大な功德が明かされています。

先の『白米一俵御書』には、仏に成るために心得るべき志について、次のように示されています。たとえば、寒さを凌ぐために着ている衣服がたった一つしかなかったとしても、それを仏に供養す

る真心こそが財供養としての志であり、あるいは自分にとって今日の命をつなぐ唯一の食物であっても、その貴重な食物を仏に供養することが、凡夫の身命を仏に奉る財供養の精神であると御教示であり、その志こそ「薬王のひぢ(臂)をやき、雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいをと(劣)らぬ功德」になると仰せられています。

日蓮大聖人御在世当時、伊豆配流の際には船守弥三郎が、そして佐渡配流に際しては、阿仏房夫妻らが自身の危険を顧みずに、日蓮大聖人の御命をつなぐための食物などを御供養し、献身的に給仕申し上げました。また、富士上野の南条家は、日蓮大聖人への信仰を阻もうとする鎌倉幕府の弾圧を受け、地頭でありながら乗る馬もないほど逼迫した経済状況の中でも、日蓮大聖人へ御供養を欠かすことなく続けられたのです。

そのように先達方が、外護の精神をもって文底下種の三宝を守り抜いてきたからこそ、今日の私たち法華講衆はその恩恵に浴しているのです。よって、その清流を受け継ぐ私たちは、常に正法外護の志に立ち、総本山と所属寺院の御本尊へ真心の御供養をさせて頂くことが大事であり、この財供養によって日蓮正宗の法灯は護られ、また宗勢と寺運は興隆し、多くの人々が本門戒壇の大御本尊の功德に浴することが叶うのです。

但し、日蓮大聖人が『新池御書』にて、

**度々の御供養は、法華経並びに釈迦尊の御恩を報じ給ふに成るべく候。弥は  
げませ給ふべし、懈ることなかれ。** (御書1457頁)

と仰せの通り御供養は報恩行であり、一生を通じての修行ですので、無理があってはなりません。自分の志を仏に捧げるところに御供養の本義があるのですから、内容や多寡に関わらず、常日頃から御供養を心掛けることであり、真心をもって供えさせていただくことが大切なのです。

また日々の御本尊へのお給仕では、仏壇を清掃し、お水や楮を供え、朝夕の勤行や唱題には線香を焚き、蠟燭などの灯明を灯します。そして、仏飯をお供えすることなどのすべてが財供養となります。真心をこめて御本尊にお仕え申し上げます。

## 6、真の法供養と財供養

日蓮大聖人は『松野殿御返事』に、

**在家の御身は、但余念なく南無妙法蓮華経と御唱へありて、僧をも供養し給  
ふが肝心にて候なり。それも経文の如くならば随力演説も有るべきか。**

(御書1051頁)

と、信仰の基本姿勢を示されています。

この御教示のままに日常から、一心にお題目を唱え、また生身の御本仏日蓮大聖人である御本尊に真心からの御供養を供え奉り、そして2021年の日蓮大聖人御聖誕八百年、法華講員80万人体勢構築の御命題達成に向かい、益々日々折伏弘教に励んで自行化他の信行に邁進することが、真の財供養と法供養であることを心得て、その実践をもって大いに功德を積んでいきましょう。